

蛩ヶ池西遺跡

1988年3月

豊中市教育委員会

蛭ヶ池西遺跡

1988年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、近年住宅地としての開発が進み、近代都市として、その姿を変えてまいりましたが、それにあわせて新しい遺跡が発見されるなど、歴史的、文化的に貴重な資料がつぎつぎに得られております。

このたび、大阪国際空港の東側に位置する蛍池西町2丁目において発掘調査を実施いたしました。この遺跡も近年の開発に伴って新たに発見された遺跡であります。この地域周辺には勝部遺跡をはじめとし、著名な遺跡が多く点在し、学術的にも重要な意味をもつ地域であります。今回の調査におきましても自然の河川を利用しつつ生活した先人の痕跡がうかがわれます。しかしこの周辺におきましては、発掘調査が緒についたばかりであり、このような作業を繰り返すことにより、先人のくらしぶりが明らかにされ、現代社会に活かされる日がくることと思います。

調査にあたりましては、文化財の重要性を十分に御理解いただいた土地所有者大阪トヨペット株式会社をはじめとし、調査から本書の刊行まで長期にわたり御協力いただいた調査関係者、御指導いただいた諸先生方に対し、厚くお礼申し上げますとともに皆さまの御協力に支えられて、文化財行政がより一層押し進められることを念じ、序文といたします。

1988年3月

豊中市教育委員会
教育長 湯元 英世

例 言

1. 本書は、豊中市蛍池西町2丁目147-1番地において、株式会社大阪トヨベットの社屋建設に伴う事前調査として行なった蛍池西遺跡第3次調査の報告書である。
2. 発掘調査は1984年3月8日より4月19日にかけて実施し、以後豊中市立郷土資料室において整理作業を行なった。
3. 本書の編集は伊藤雅文が行なったが、本文については第I章(1)を柳本照男、第I章(2)・第II章を山元建、第III・V章を伊藤雅文、第IV章を伊藤・山元・吉村和昭がその執筆にあたった。
4. 写真撮影は伊藤が行った。
5. 調査にあたっては岡崎茂和、田上雅則、前田佳久、清水篤、鐘方正樹の協力を得た。記して感謝したい。
6. 本書の図面の方位は全て磁北である。

本文目次

第I章 調査に至る経過	
(1) 調査の契機	1
(2) 調査日誌	2
第II章 位置と環境	4
第III章 検出遺構	6
第IV章 出土遺物	
(1) 土器	14
(2) 石器	20
第V章 まとめ	25

図版目次

PL. 1	遺構検出状況
PL. 2	SD-01~03 上層除去
PL. 3	SD-01 土器出土状況
PL. 4	遺構検出状況
PL. 5	遺構検出土状況
PL. 6	遺構検出土状況
PL. 7	溝内土層
PL. 8	SD-01 出土土器
PL. 9	SD-01 出土土器
PL. 10	SD-01 出土土器
PL. 11	SD-02, 03 出土土器
PL. 12	第2層(床土) 出土石器・土器

挿 図 目 次

	頁
fig. 1 調査位置図	1
fig. 2 調査風景	2
fig. 3 //	2
fig. 4 調査区全体図	3
fig. 5 周辺遺跡分布図	5
fig. 6 S D - 01 土層図	6
fig. 7 S D - 01・02・03 実測図	7～8
fig. 8 S D - 02 土層図	9
fig. 9 S D - 03 土層図	10
fig. 10 S D - 03・02 土層断面図	10
fig. 11 S D - 04 土層図	11
fig. 12 - a S D - 08 検出状況	11
12 - b S D - 08 掘削完了状況	11
fig. 13 S D - 04・10 実測図	12
fig. 14 S D - 08 土層図	13
fig. 15 S D - 01 下層土器出土状況	14
fig. 16 S D - 01 下層出土土器	14
fig. 17 S D - 01 中層土器出土状況	14
fig. 18 S D - 01 中層出土土器	15
fig. 19 S D - 01 中層出土土器	16
fig. 20 S D - 02 出土土器	17
fig. 21 S D - 03 出土土器	18
fig. 22 床土出土土器	19
fig. 23 床土出土ナイフ型石器	20
fig. 24 S D - 01 中層出土土器の層位関係	25
fig. 25 S D - 01 断ち割り状況	26

第 I 章 調査に至る経過

(1) 調査の契機

当遺跡は昭和 53 年 9 月に、今回の調査地点より南方約 300 m 付近において初めて発見された遺跡である。この第 1 次の調査では弥生時代後期と古墳時代後期の遺構が検出され、町名をとって蛭池西遺跡と命名された。その後、昭和 54 年 7 月に第 1 次調査地点の東南側 100 m の場所において、第 2 次調査を実施した。検出した遺構は古墳時代中期の大溝のみであったが、溝底の黄色粘土の地山層に食い込むようにナイフ型石器と石核が出土した。

このような状況の中で、昭和 59 年 1 月、当調査地において建築確認申請が市に提出された。当課では、今までの状況から察して、北方にも遺跡が広がっている可能性が高く、発掘調査の必要性があることを開発者に説明し、協議した。その結果、全面調査が必要であるかどうか判断するために、まず試掘調査から実施することで了解をいただき、試掘調査に着手し、以後、全面調査に移っていったのである。

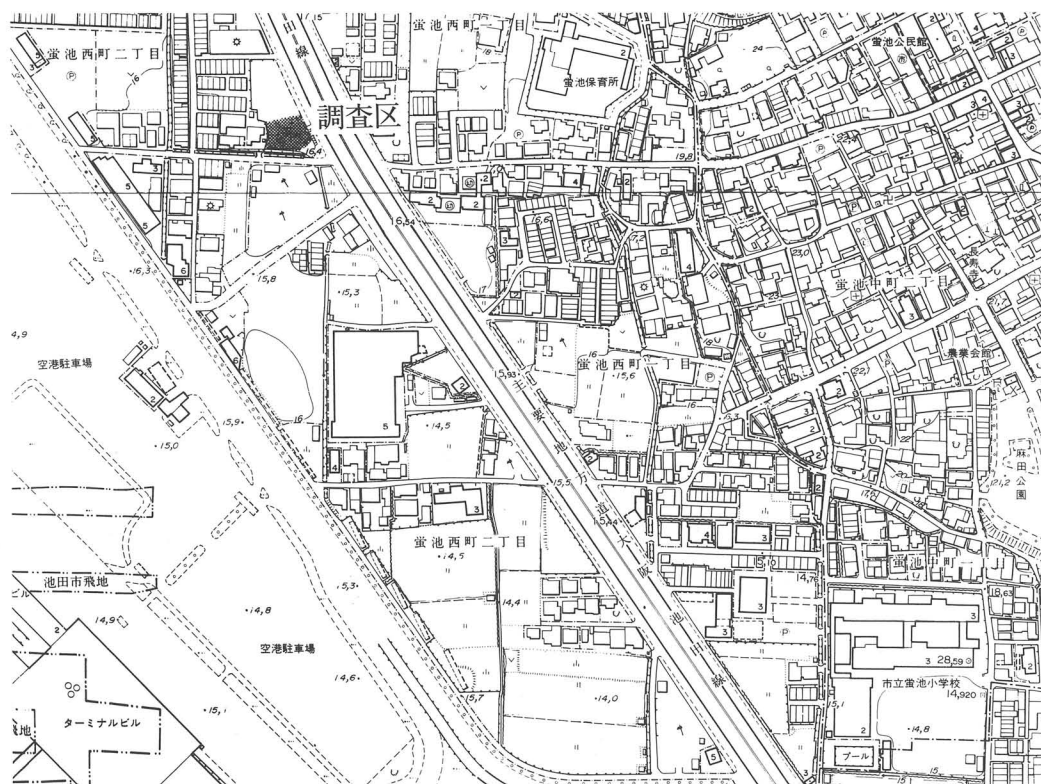


fig. 1 調査区位置図

(2) 調査日誌

- 3月8日 晴時々曇 南北両トレンチを設定し、耕土・床土を除去する。絶対高を基準ポイントより調査区内に移す。
- 3月12日 晴後曇 トレンチを地山面まで掘下げる。両トレンチでSD-01・02、北トレンチでSD-04・方形周溝状遺構(後のSD-08)を検出する。
- 3月14日 曇時々雨 トレンチの遺構を完掘する。
- 3月15日 晴後雨 トレンチの精査および清掃後、北トレンチの断面実測を行なう。
- 3月16日 雨 トレンチの断面略測および平板測量を行なう。
- 3月17日 晴 トレンチの断面実測および写真撮影を行なう。
- 3月22日 晴 本日より本調査。重機掘削を開始する。
- 3月24日 雨 重機掘削と併行して遺構の検出に努める。新たにSD-03を検出する。
- 3月27日 晴 SD-02・03合流地点を精査する。SD-10を検出する。
- 3月28日 曇後晴 調査区東部を精査する。
- 3月29日 晴 SD-02・03合流地点を精査する。
- 3月30日 晴 午前は地区設定の杭打ちを行ない、午後は全体の写真撮影を行なう。
- 3月31日 曇後晴 SD-04の掘削、SD-02・03の南端部分の上層掘削を行なう。
- 4月2日 晴 SD-01~03の上層を掘削する。SD-05を検出する。
- 4月3日 晴 SD-01~03の上層を掘削する。SD-06を検出する。
- 4月4日 曇後雨 SD-01~03上層を完掘する。

- 4月5日 雨後曇 土器洗浄および雨水汲出しを行なう。
- 4月6日 晴 午前は雨水汲出しを行ない、午後は清掃および、SD-02の写真撮影を行なう。
- 4月7日 晴 SD-02・03の中層を完掘後下層掘削を始める。
- 4月8日 晴 SD-02の下層・最下層、SD-03の下層の掘削を行なう。
- 4月9日 晴 SD-01中層の土器群を精査し、写真撮影を行なう。SD-03中層を完掘する。
- 4月11日 雨後晴 SD-01~03をほぼ完掘する。SD-01の断面に沿って断割を入れる。
- 4月12日 晴 SD-01断割を完了する。SD-02・03②アゼの断面実測を行なう。
- 4月13日 晴 SD-02・03②アゼ除去後、清掃し、写真撮影を行なう。
- 4月14日 晴 SD-01を中心とした写真撮影を行ない、午後から平板実測を行なう。
- 4月15日 晴後曇 SD-01~03断面の土層名記入・写真撮影およびSD-01断面実測を行なう。平板図用の割付も行なう。
- 4月16日 雨 断面実測を完了する。平板実測を開始する。
- 4月17日 晴 平板実測、レベル記入、土層名記入を完了する。
- 4月18日 晴 午前は地鎮祭のため作業を中止する。午後、実測図の修正を行なう。
- 4月19日 雨 機材を撤収する。

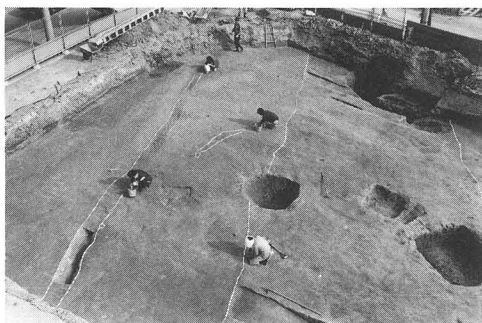


fig 2. 調査風景



fig 3. 調査風景

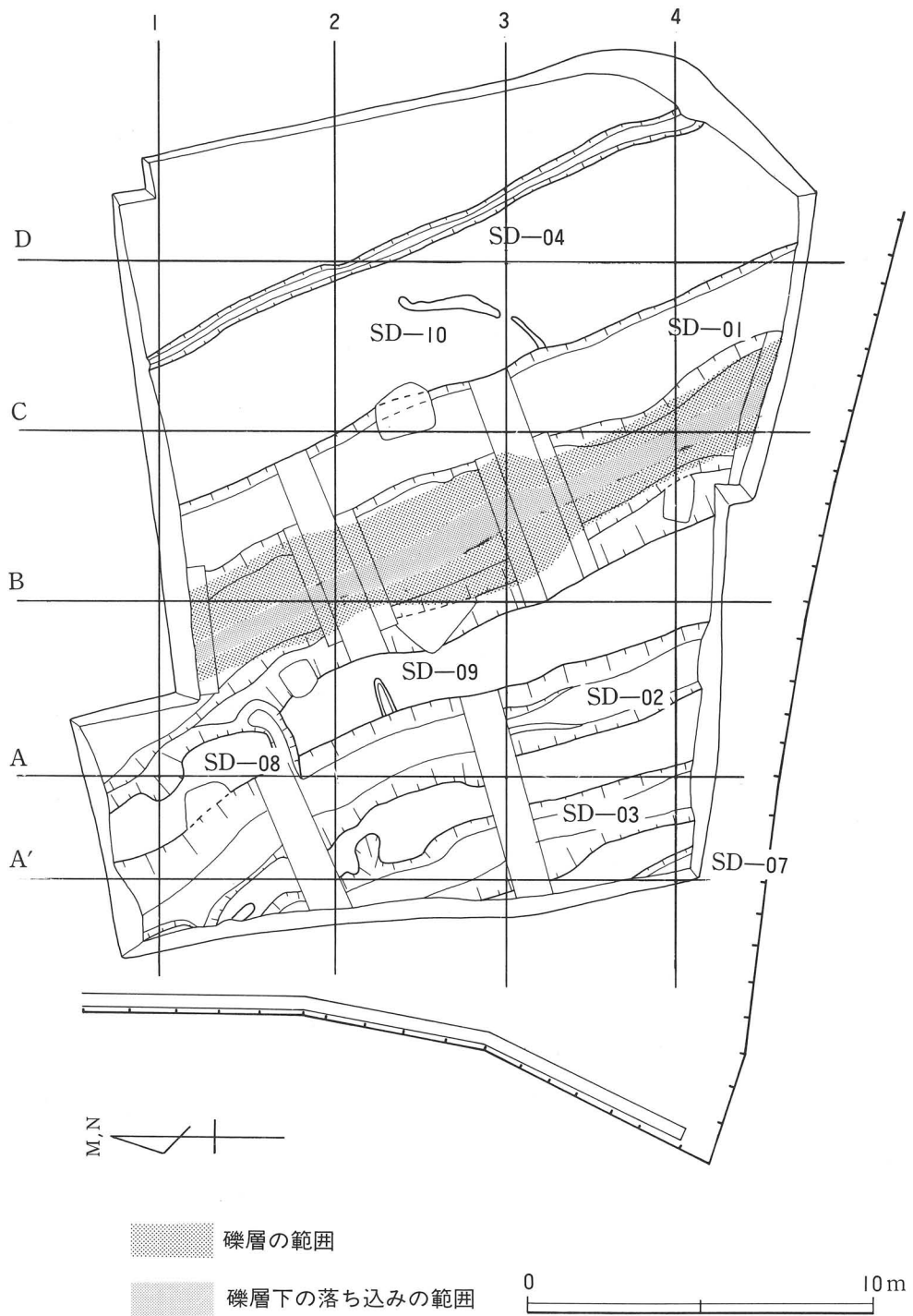


fig 4. 調査区全体図

第II章 位置と環境

猪名川の堆積によって形成された西摂平野は、その東方で豊中台地に接しています。蛍池西遺跡はその豊中台地を背後に控える平野の縁辺部に位置し、旧石器時代から中世まで綿々と人々の生活が営まれた複合遺跡で、現在の蛍池西町二丁目付近に広がっています。

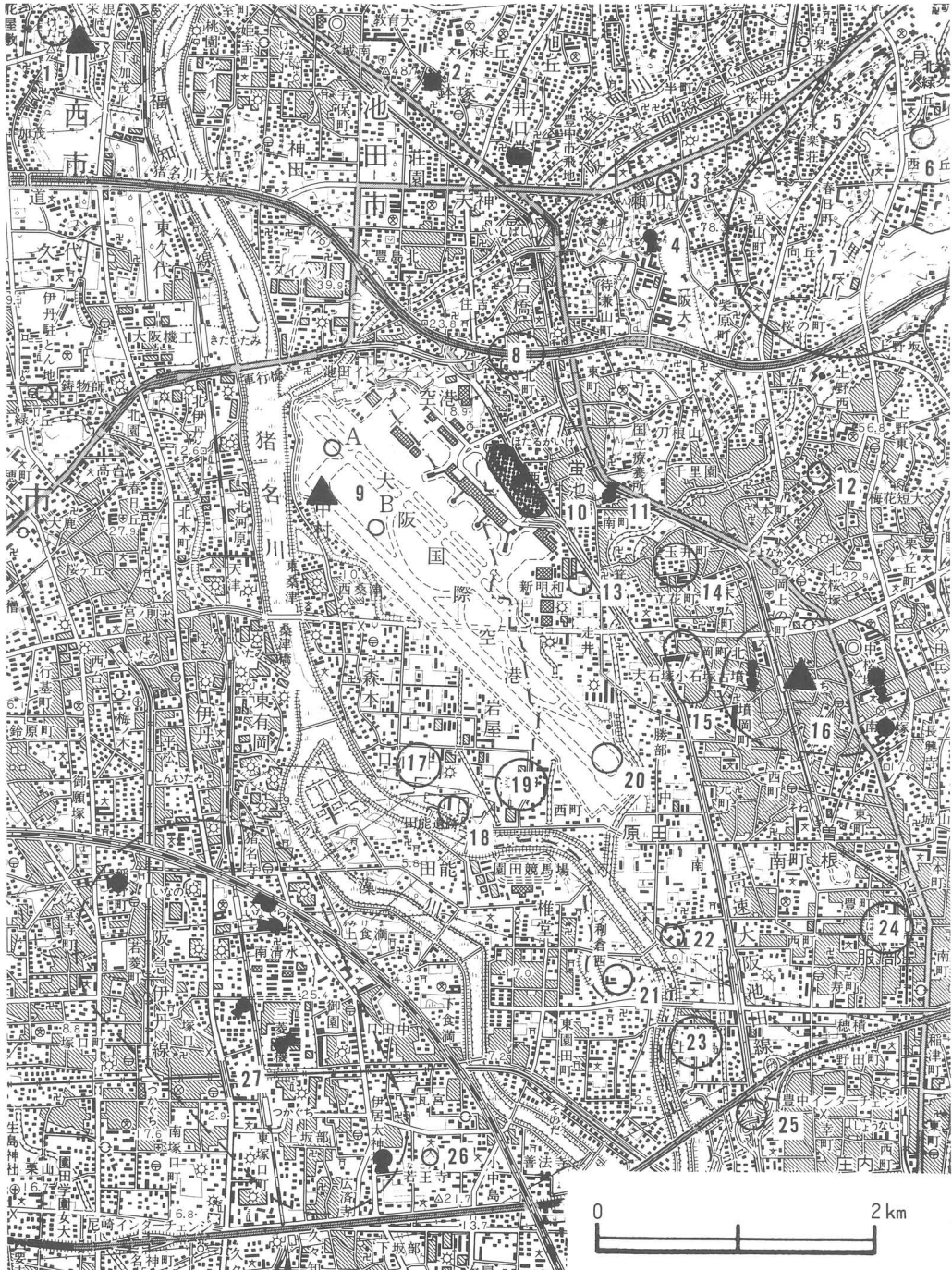
周辺の遺跡に目を移すと、まだ土器の使用がなされなかった旧石器時代の遺物が、当遺跡の他に、川西市加茂遺跡、池田市宮ノ前遺跡などから出土し、西摂平野をとりまく台地の縁辺付近がその生活の場であったようです。

続く縄文時代は、前期・後期の遺跡である箕面市瀬川遺跡、中期の土器包含地である大阪空港A遺跡、中期・後期の豊中市野畑遺跡などが知られています。箕面市新稲、池田市伊居太神社境内には当時の石鏃などが出土しており、狩猟採集経済の一端をうかがい知ることができます。また、最近発掘調査のなされた口酒井遺跡は晩期から弥生時代へと継続する遺跡です。

さて、大陸から伝わった水稲耕作・金属器の使用、あるいは弥生土器の使用をもって特徴づけられる弥生時代になると、猪名川の豊かな流れを利用して多くの水田が営まれた様であり、西摂平野は、にわかに活気を帯びてきました。木棺墓・銅釧・玉類・銅剣鑄型などの出土した尼崎市田能遺跡、中期を中心とした加茂遺跡・宮ノ前遺跡、蛍池西遺跡の東南方に位置する箕輪遺跡・新免遺跡・山ノ上遺跡などが知られています。前期・中期を中心とした豊中市勝部遺跡では腰部に石槍を受けた人骨が出土し、弥生時代がその名から受ける印象に反して、階級社会に至る争乱の時代であったことがうかがえます。また、箕面市如意谷、豊中市原田神社境内、川西市栄根、伊丹市中村からは銅鐸が出土しています。

古墳時代になると、まず宝塚市万頼山古墳、豊中市待兼山古墳・御神山古墳、池田市茶白山古墳・娛三堂古墳などの前期古墳が築造され、ついで中期には豊中市桜塚古墳群、尼崎市を中心とした猪名野古墳群が猪名川をはさむかっこうで形成されました。それらの古墳群を支えたのは、豊中市利倉西遺跡・庄内遺跡・島田遺跡などの集落でした。また、後期になると、宝塚市長尾山古墳群、池田市鉢塚古墳などの横穴式石室墳が知られ、豊中市の桜井谷では古墳時代から奈良時代にかけての須恵器の窯跡が分布しており、太鼓塚古墳群はそれに関係する人々の墓と考えられています。

その後、飛鳥時代に伊丹市伊丹廃寺・尼崎市猪名野廃寺、白鳳時代に豊中市金寺山廃寺などの寺院が建立され、間もなく西摂平野にも条里制が施行されていきます。



- | | | | | |
|----------|-------------|----------|----------|-----------|
| 1 加茂遺跡 | 7 桜井谷窯跡群 | 13 箕輪遺跡 | 19 原田西遺跡 | 25 島田遺跡 |
| 2 鉢塚古墳 | 8 宮ノ前遺跡 | 14 新免遺跡 | 20 勝部遺跡 | 26 若王寺遺跡 |
| 3 瀬川遺跡 | 9 大阪空港A・B遺跡 | 15 山ノ上遺跡 | 21 利倉西遺跡 | 27 猪名野古墳群 |
| 4 待兼山古墳 | 10 蛭池西遺跡 | 16 桜塚古墳群 | 22 利倉遺跡 | 28 伊丹廃寺 |
| 5 太鼓塚古墳群 | 11 御神山古墳 | 17 酒井遺跡 | 23 上津島遺跡 | ▲ 銅鐸出土地 |
| 6 野畑遺跡 | 12 金寺山廃寺 | 18 田能遺跡 | 24 穂積遺跡 | ● 古墳 |

fig 5. 周辺遺跡分布図

第III章 検出遺構

基本土層

本調査区の基本層序は上から盛土・旧耕土・床土・地山です。調査区西半には床土はなく、5 cmの厚さで中世包含層が残されています。床土と同一の機能を持っていたと思われます。調査区ほぼ中央にSD-01と平行した状況で畦畔が確認されました。この部分の床土は厚く約30 cmを測ります。床土からは鎌倉時代の瓦器あるいは土師質土器等が出土し、水田造成時期の上限は中世と思われます。遺構はすべて地山に掘り込まれており、弥生時代の包含層は後世の削平によって残されていません。

SD-01

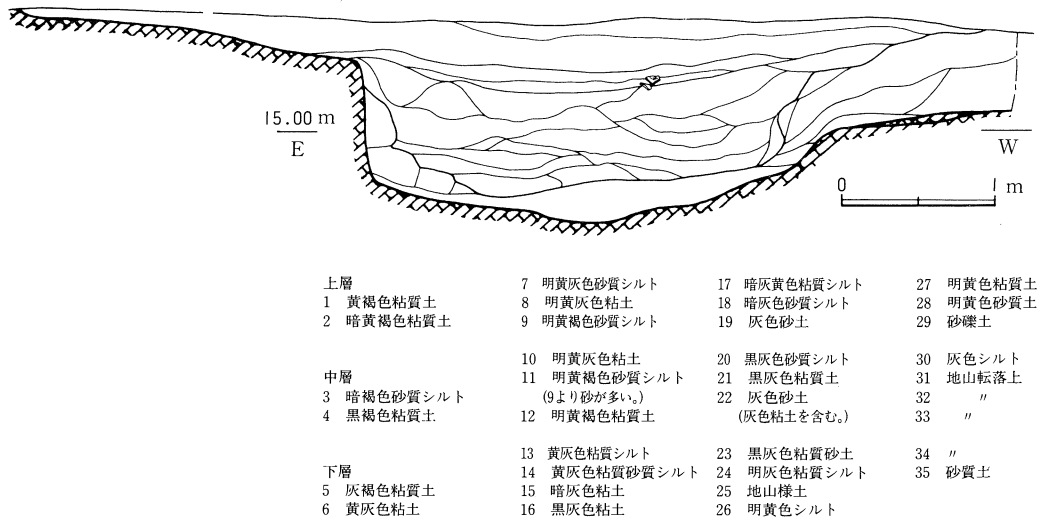


fig 6. SD-01 土層図

SD-01 は調査区のほぼ中央を北西から南東方向に伸びる弥生時代の大溝です。土層の観察から活発な流れはなかったと思われます。調査区ほぼ中央で幅 4.8 m、深さ 1 mを測りますが、北端と南端との高低差は少なく深さもほぼ一定しています。

SD-01 は二段掘りの溝です。一段目東の溝端は明瞭な下端を持つのにに対し、西の溝端は緩やかに高さを減じ二段目端にいたります。一段目肩と二段目肩とにあるテラスは東側が 2.2



fig 7. SD-01,02,03 実測図

～2.7 m、西側が1.1～1.7 mと東側の方が広がっています。溝の西側の方が約20 cm低いので中世時に削平された結果とも考えられます。二段目溝肩は東西両壁ともほぼ垂直におち、溝底と考えている礫層に達します。二段目の溝の壁は不明瞭でわずかの地山土の崩壊が確認できました。

溝内土層は基本的に三区分できます。上層は褐色砂質シルト土、中層は黒褐色粘質シルト土～粘質土、下層は暗灰色粘質土～粘土です。溝内には流れを示す砂質土あるいは砂土が僅かに含まれる程度なので、活発な流れを推定できません。特に、中層から下層にかけては炭化物を多く含み、中層は一部ピート状を示します。

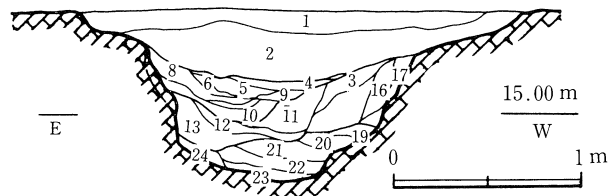
土器の大多数が中層から下層にやや沈み込んだ位置で出土しています。土器のほとんどが西側2段目東溝端近くで出土しています。そのいくつかは中層のカーブに沿って出土しているので、土器の廃棄は西側から東側方向になされたと考えられます。土器群は大きく2カ所検出されました。土器群Aは高杯・甕、土器群Bからは壺・甕が出土しました。下層からは調査区北端近くで甕底部一個体分が出土したのみです。

SD-02

SD-02はSD-02、03とほぼ平行して北から南に向って流れるU字形の溝です。溝の両壁はほぼ垂直におち溝底に至ります。溝底中央には幅20 cm、深さ15 cmを測る小溝が掘り込まれています。調査区内の北端と南端とでは高低差が10 cmあります。なお、調査区北西隅近くには山の盛り上りが認められます。

位置から推測すると、SD-03と部分的に合流する可能性があり、その幅は約1 mです。

溝内埋土は基本的に上・中・下・最下層の4層に区別できます。上層は暗黄灰色砂質シルト土、中層は黄灰色粘質土で部分的に確認できます。下層は灰色粘土、最下層は砂礫土と黒褐色粘土の層です。溝が埋まる過程は、1.大きな流水によって流されてきた砂礫土及びその後の緩やかな流れによって沈殿した粘



上層	7 黄灰色砂土	14 灰褐色粘質シルト
1 暗黄色砂質土	8 暗灰褐色砂質シルト	15 暗灰褐色シルト
2 暗黄褐色砂質シルト	9 灰色砂土 (シルト質)	16～18 地山転落土
	10 黒灰褐色粘質土	
中層	下層	最下層
3 灰褐色粘質シルト	11 黒灰褐色砂質シルト	19 黒灰色砂質シルト
4 暗灰褐色粘質シルト (砂含む)	12 暗灰色砂質粘土 (地山土含む)	20～22 砂礫土
5 地山転落土	13 灰褐色シルト	23 黒灰色粘土
6 灰色砂土 (シルト質)		24 黒灰色砂質シルト

fig.8 SD-02 土層図

土の堆積がなされました。2.その大きな流れによって弛緩した両溝壁（地山土）の崩壊がみられます。3.小規模な地山の崩壊を伴いながらシルト土の堆積がみられます。この時は緩慢な水流があったと思われ、砂土の混入が若干みられます。

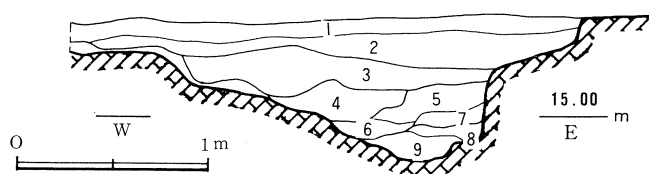
遺物の出土量は極めて少なく、上層から古式土師器と思われる高杯脚部および古墳時代後期の甕等が出土しました。下層から7世紀頃の土師器の杯、最下層から須恵器が出土しているので、その掘削時期は少なくとも7世紀頃と考えられます。しかし、上層から古式土師器が出土しているように、かなり混乱した土層といえます。

SD-03

SD-03は幅3m以上、深さ0.7mを測ります。溝内は三本の流路が確認でき（SD-05・06・07）、SD-01・02と異なりかなり激しい水流が予想されます。

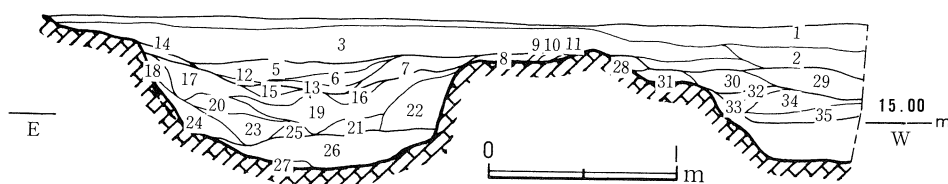
SD-03の西側は東側に比べ約8cm低く、覆水による堆積が若干みられます。SD-07はその層から掘り込まれて造られています。

埋土は明灰色粘質シルトで地



- | | |
|---------------------|---------------|
| 上層 | 下層 |
| 1 暗黄色砂質土 | 5 暗灰色粘質シルト |
| 2 暗黄褐色砂質シルト (SD-05) | 6 灰色砂土 |
| 3 暗灰褐色粘質シルト | 6 灰色砂土 |
| | 最下層 |
| | 7 灰色砂土 |
| | 9 " (粘土を多く含む) |

fig9. SD-03 土層図



- | | | | |
|----------------|---------------------|----------------------|-----------|
| SD-02,03上層 | 11 明灰褐色砂質シルト (9と同層) | 23 灰色粘質土 | SD-03下層 |
| 1 暗黄色砂質土 | 12 灰褐色砂質シルト | 24 灰色粘土 | 32 灰色砂質粘土 |
| 2 暗灰色粘質シルト | 13 " (6より暗い) | 25 暗灰色砂質シルト | 33 " |
| 3 黄灰色砂質シルト | 14 灰褐色砂質シルト | SD-02最下層 | 34 灰色砂 |
| 4 灰褐色粘質シルト | | | 35 黄色砂 |
| | | | 26 砂礫土 |
| SD-02中層 | SD-02下層 | 27 窯灰色粘土 | SD-03最下層 |
| 5 明灰色砂質シルト | 15 灰色砂質シルト | | 36 砂礫土 |
| 6 灰褐色砂質シルト | 16 明灰色砂質粘土 | SD-03中層 | |
| 7 明灰褐色砂質シルト | 17 灰褐色砂質粘土 | 28 明灰褐色砂質シルト | |
| 8 " | 18 暗灰色粘質土 | 29 暗灰黄色粘質シルト (SD-06) | |
| 9 (8より茶味強い) | 19 灰褐色砂質シルト | 30 灰色砂質シルト | |
| 10 (8,9より粘質強い) | 20 暗灰色シルト(茶味強い) | 31 灰褐色粘質シルト (黄色味強い) | |
| | 21 暗灰色粘質シルト | | |
| | 22 地山転落土 | | |

fig 10. SD-03・02 土層断面図

山を掘り込んでいます。

SD-03 内流路としてSD-05・06 があります。SD-05 は上層から掘り込まれており非常に浅く、埋土は灰色粘土で、そこから緑釉陶器が出土しています。SD-06 は調査区南端で明らかに確認することができますが、北側に行くにしたがってSD-03 とオーバーラップし、SD-03 埋土と判別がし難くなっていきます。溝幅も広がり、SD-03 の流路とほぼ同じになっていきます。したがって、SD-05 は上層に、SD-06 は上・中層にほぼ対応するといえます。全般的にSD-02 と類似し、最下層は砂礫層で溝両壁の崩壊を確認できます。

最下層から須恵器片・中層からは7世紀前半の須恵器・上層検出面から緑釉陶器と土層に混乱はみられません。

SD-04

SD-04 はSD-01~03 にほぼ平行し、調査区東端近くで検出されました。幅40~60 cm、深さ20 cmを測り、溝底がやや平らなU字形を呈する溝です。埋土は概ね2層に区分され、上層は淡灰褐色砂質土、下層は黄灰褐色砂質土です。溝内出土土器がないので溝の掘削時期は不明ですが、SD-10 と埋土がよく似ているので、同時期の遺構の可能性が高いと思われます。



fig.11 SD-04 土層図

SD-08

SD-08 はSD-01 と 02 をつなぐ幅80 cmの溝です。埋土は上下2層に区分され、各々が01の上下の層に対応します。SD-01 側(東側)の深さは36 cm、西側は85 cmを測り、西に向って深くなっていきます。また東側は隅が丸い矩形を

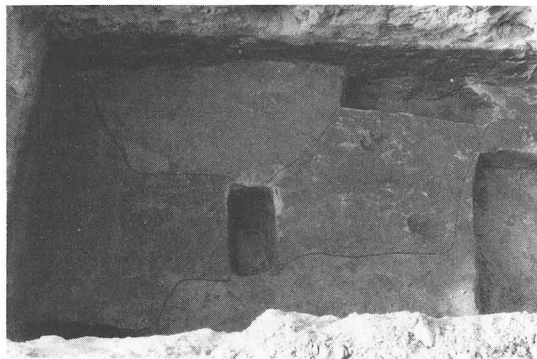


fig.12-a SD-08 検出状況

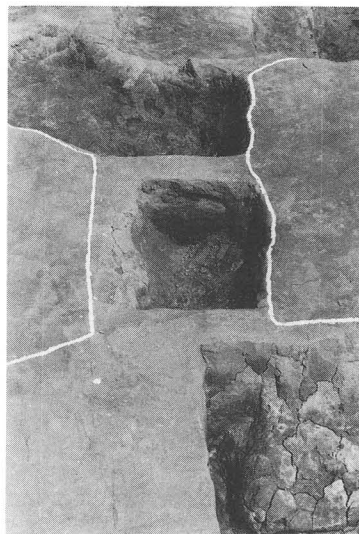


fig.12-b SD-08 掘削完了状況

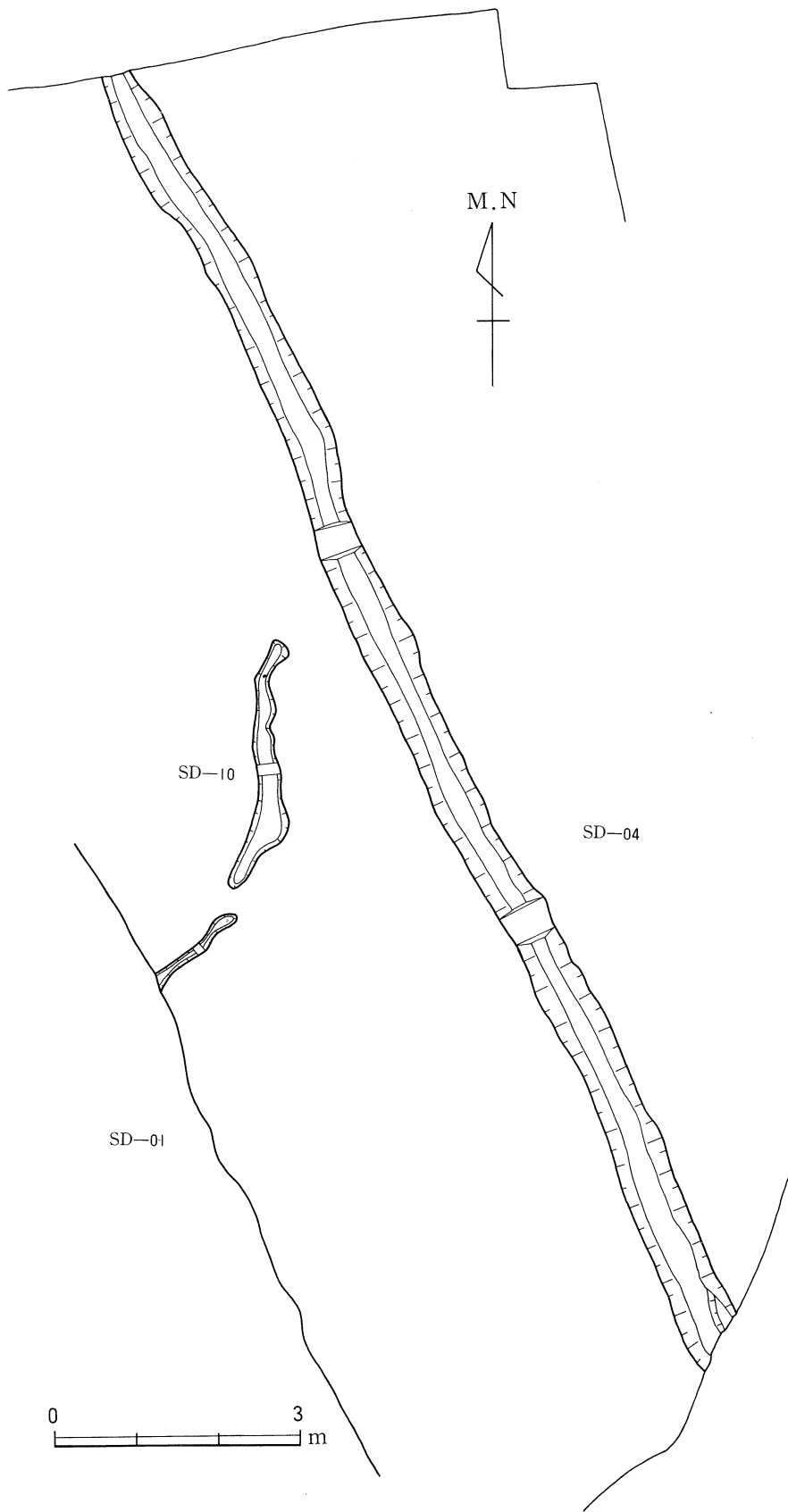


fig.13 SD-04、10 実測図

していますが、そこから北に向って幅 40 cm、深さ 30 cmを測る細い溝が続きます。これはSD-01の2段目の西壁に至ります。

SD-01の上層を除去した段階でSD-08の溝の輪郭が検出されるので、SD-01下層が堆積し、中層を形成している時に掘削されたと思われる。したがって、SD-01と02とは同時期に存在していたと思われます。またこの溝の機能として、SD-01のオーバーフローする水をSD-02に流すことが考えられます。

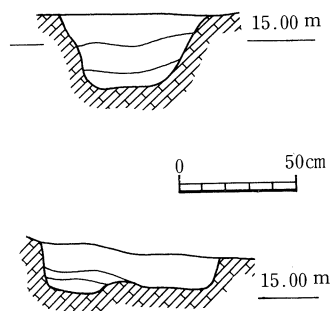


fig.14 SD-08 土層図

SD-09

SD-09は幅 46 cm、深さ 10 cmを測ります。埋土はほぼ単一で砂質性の強い黄灰色砂質土です。この溝はSD-02より先に造られています。

SD-10

SD-10はSD-01・04の中間にあり、01よりも先に造られています。不完全な弧状を呈し、途中で1カ所途切れています。溝の幅、深さとも各所で大きく異なっていますが、東溝は幅 20~42 cm、深さ 3.5 cm、西溝は幅 14~18 cm、深さ 5~10 cmを測ります。西溝の方が細く深いです。埋土も両者の間には少なからずの差があり、西溝は灰褐色砂質土、東溝は砂質の黄灰色砂質土です。西溝埋土内から弥生土器の細片が出土しています。

第IV章 出土遺物

(1) 土器

a SD-01 下層出土土器



fig.15 SD-01 下層土器出土状態

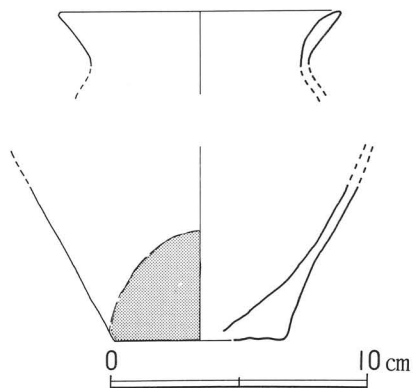


fig.16 SD-01 下層出土土器

SD-01 下層から甕が一個体分出土しています。磨滅が非常に激しく内外面とも調整は不明ですが、ほぼ平底の底部から直線的に体部に続く形態からみて弥生時代中期の中頃から後半期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）の高さ 25 cm 程の甕と考えられます。色調は赤褐色を呈し、底面から体部下半にかけて黒斑が認められます。

b SD-01 中層出土土器

上層から出土した土器量は少なく、高杯 1 点のみです。挿入付加法によるもので、この技法は弥生時代後期後半から採用されますが、胎土、焼成等から古式土師器と思われます。

中層、あるいは中層から沈み込んだ状態で弥生時代後期の土器が出土しています。器種は壺・甕・鉢です。

壺 (fig.18-1~6) 図示したのは 6 点です。広口壺 (1-3・6)、二重口縁壺 (4・5) のみで、長頸壺等の出土はみられません。広口壺はいずれも口縁端部を明瞭に作り出し、特に 2・3 はナデ調整に際し、擬凹線状を呈します。外面はハケメ調整、内面は指頭圧調整が施されています。



fig.17 中層土器出土状態

図上でほぼ完形に復元できた6は器高25.5cm、口径12.8cm、胴部最大径25.2cmです。底部は若干上げ底で、指ナデ調整を明瞭に残します。体部は算盤玉状で、その屈曲部分には、不明瞭ながら粘土紐の接合痕が確認できます。屈曲部は丸味をおびていますが、ほぼ直線的な体部です。頸部は若干外方に広がり端部に至ります。なお、頸部近くから赤色の粘土を用いており、口頸部と体部は色調の差が著しいです。

二重口縁壺は二個体出土しています。いずれも口縁径が約20cmとほぼ同大です。4は2個連続した円形浮文が貼られています。全周の5分の1程度しか残っていなかったので何個配土されていたか不明です。この土器片は全面黒斑に覆われています。5は一般的な二重口縁壺で、口縁部の外反の度合いは低く、二重口縁壺の中でも古い段階のものと思われます。

鉢 (fig.19-19) 有孔鉢が1点のみ出土しています。外面調整はタタキです。有孔部は約1cmで、丁寧にナデが施されています。

甕 (fig.19-18・20・21)

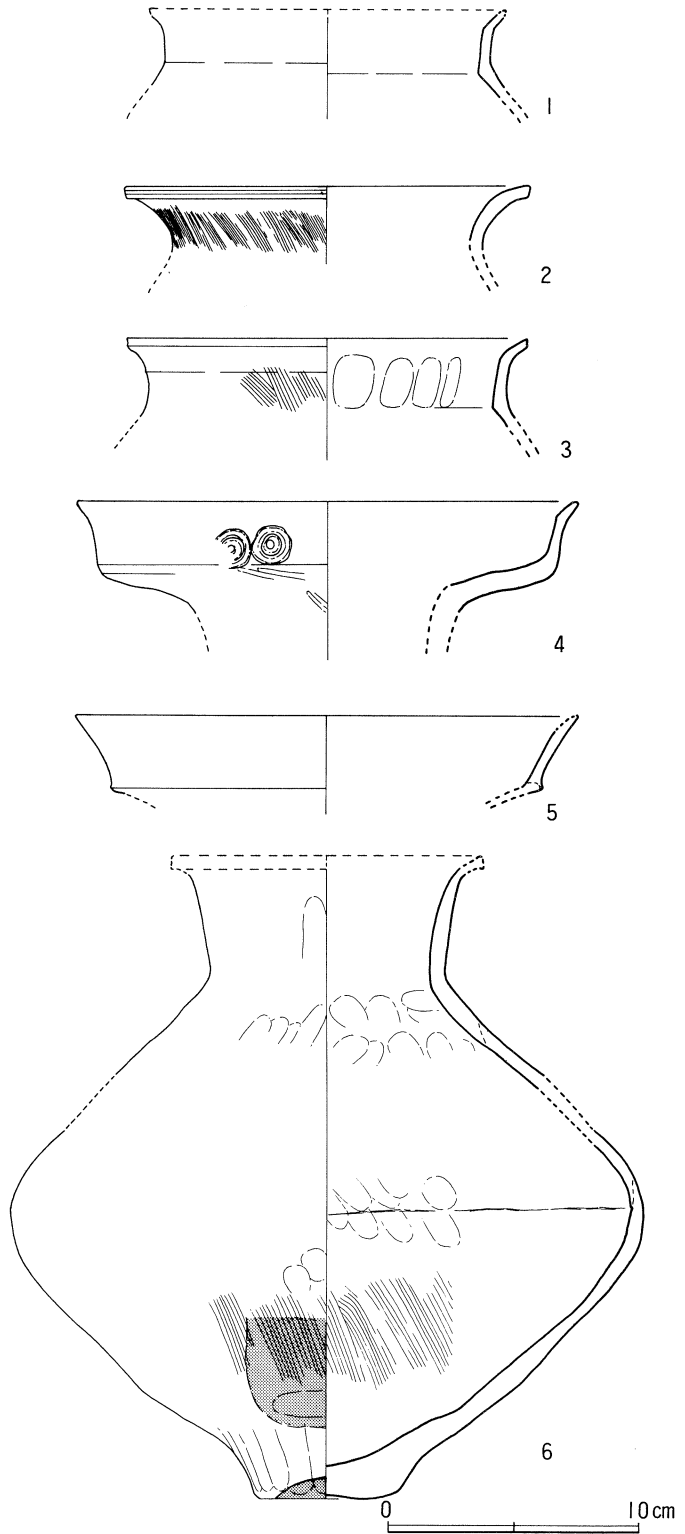


fig.18 中層出土土器

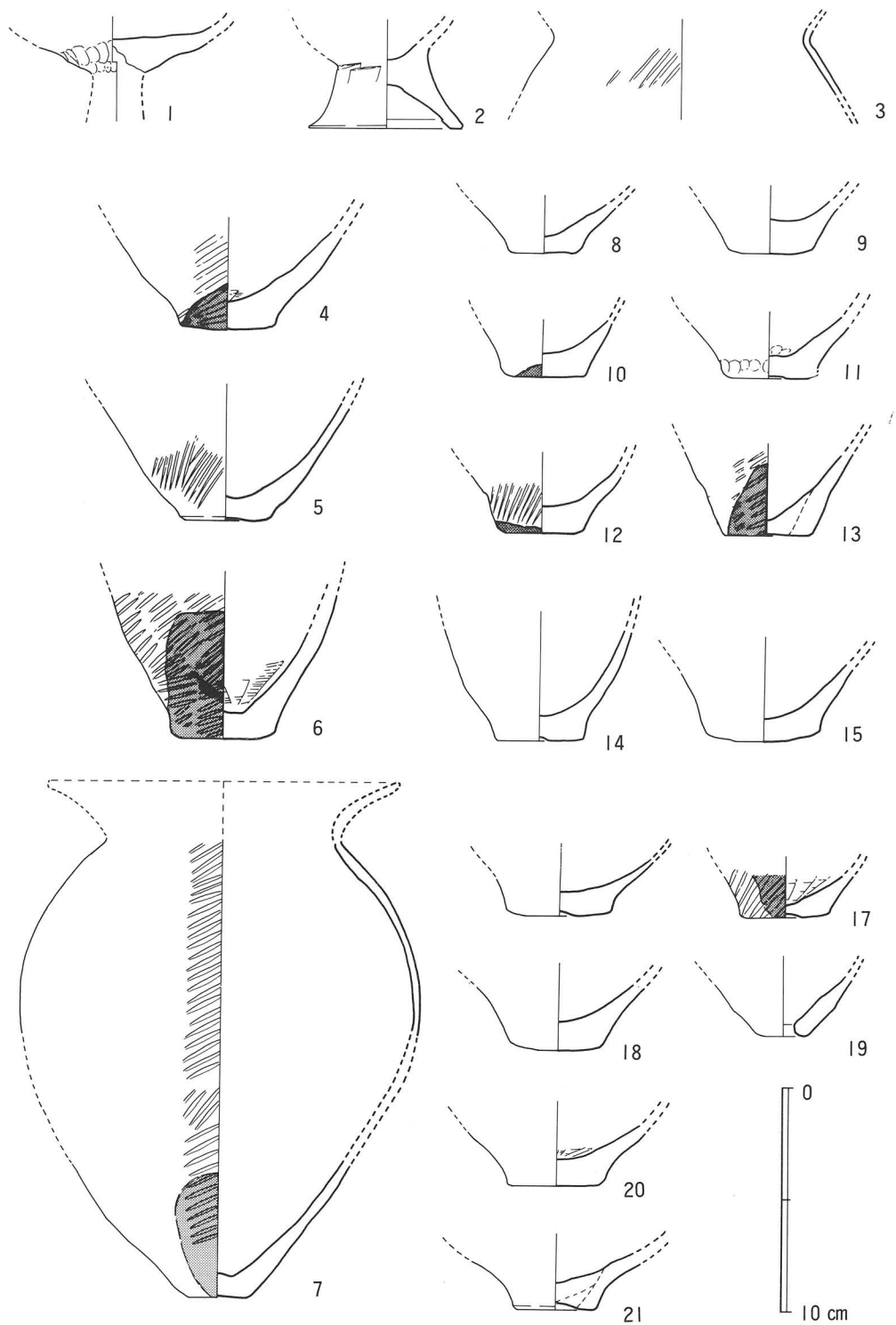


fig.19 SD-01 中層出土土器

出土土器の大半は甕の破片です。底部の破片も多いので鉢の破片も入っているかもしれません。小破片が多いので、その形態的特徴は把握しにくいですが、7から器高約23cm、口縁部径15.5cm、胴部最大径約17cmで、胴部最大径は体部のほぼ中央にあります。底部の大きさは5.5~2.7cmまでばらつきがみられますが、その大多数は4~4.5cmの範囲内に収まります。上げ底を呈する底部は4例みられますが、「低部円板充填法」による成形です。外面はタタキメ調整、底部内面はハケメ調整です。タタキメは荒いもの、細かいもの二者が存在しますが、時期差を示すかどうか不明です。

c SD-02 出土土器

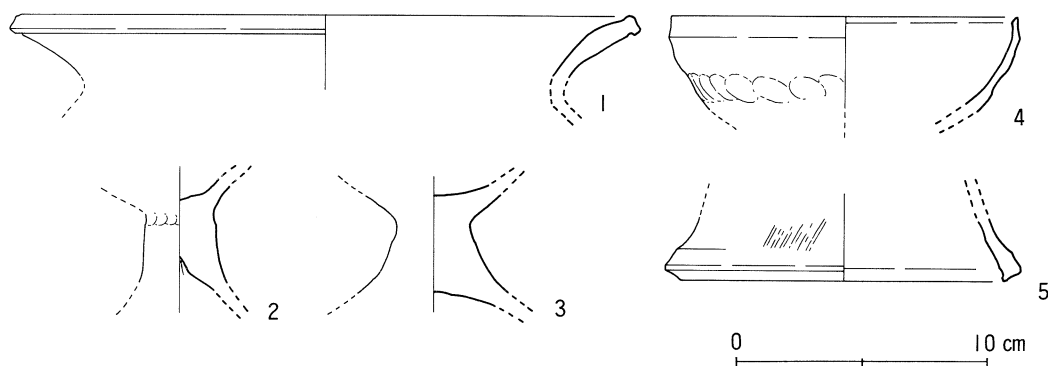


fig.20 SD-02 出土土器

SD-02の土器の出土量は非常に少なく、図示したのは5点のみです。出土量位も下層、最下層を中心に出土し、水流の比較的激しい時期のものです。土師器が4点、須恵器が1点のみです。

高杯が2点出土しており、いずれも脚柱部です。内外面とも磨滅が激しく調整は不明ですが2の内面にはしぼり痕がみられます。布留式土器と思われます。杯が1点出土しています。4は底部を欠いているので器高指数は不明ですが、立ち上がりがきつく、椀状を呈します。口縁端部は平坦面を作り出しており、強いナデ調整が施されています。外面には指頭圧痕が荒く残されています。内面には暗文が施されていたと推定されますが確認できませんでした。最下層から須恵器が数点出土しており、古墳時代後期のものです。5の器種は不明ですが、高台の部分です。タタキメが少し残されています。

d SD-03 出土土器

SD-03上面から緑釉陶器の底部の破片が出土しています。釉は高台部分付近しか遺存していませんが、色調は青緑色です。高台径が6cm程度で、その高台も貧弱ですが、壺の可能性ががあります。また高台内面はヘラケズリによって若干上げ底となっています。上層からは1・3・4が出土し、中層からは5~7、下層からは8~11が出土しています。

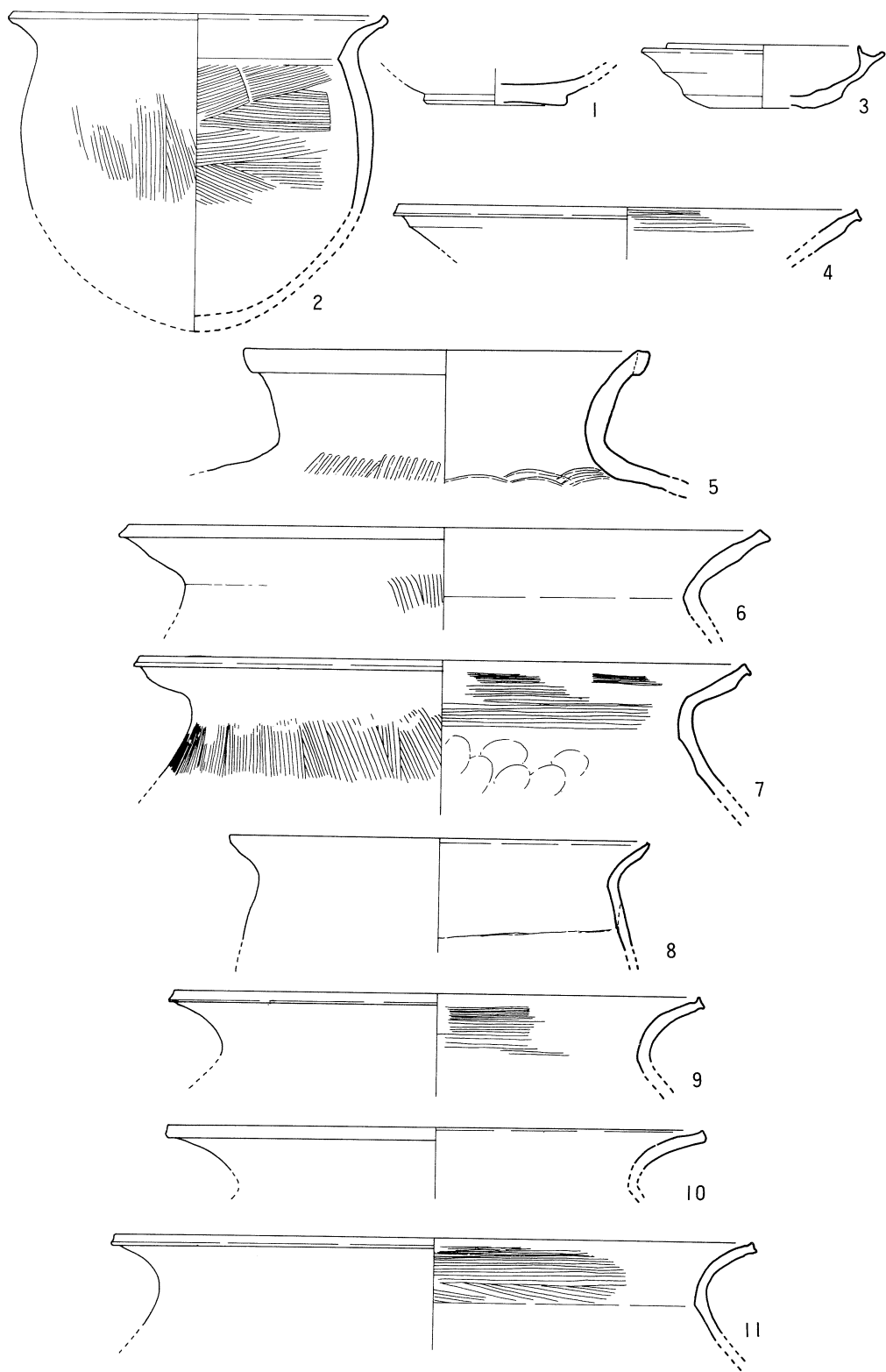


fig.21 SD-03 出土土器

0 10 cm

3は須恵器の杯身です。底部はヘラ切り未調整なので、身と判断しました。受部径10.9cmを測り、身と蓋が逆転する寸前のものです。底は若干上げ底です。体部外面はナデ調整ですが、凹凸が激しいです。受部から立ち上がりにかけてかなり鋭く作っています。5は須恵器壺です。杯身とほぼ同時期であろうと思われます。

他の遺物はすべて土師器甕です。口縁形からおよそ二者に区分できます。1つは17~19cm程度の小型の甕、1つは25cm以上の大型の甕です。後者の大型の甕はさらに分類が可能と思われます。小型の甕の口縁端部は上方に鈍く突出しています。大型の甕は上下両方に、あるいは下方に突出させています。これは端部近くに強いヨコナデが施されており、その一連の作業の結果と考えられます。全体のプロポーシオンを推定できるのは小型の甕です。肩があまり張らず、体部径が口縁径を凌駕することなく楕円の体部を有します。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整、口縁部外面はナデ調整、内面はハケメ調整です。なお、口縁部内面のハケメ調整によって肩部に稜を作り出しています。

e 床土出土土器

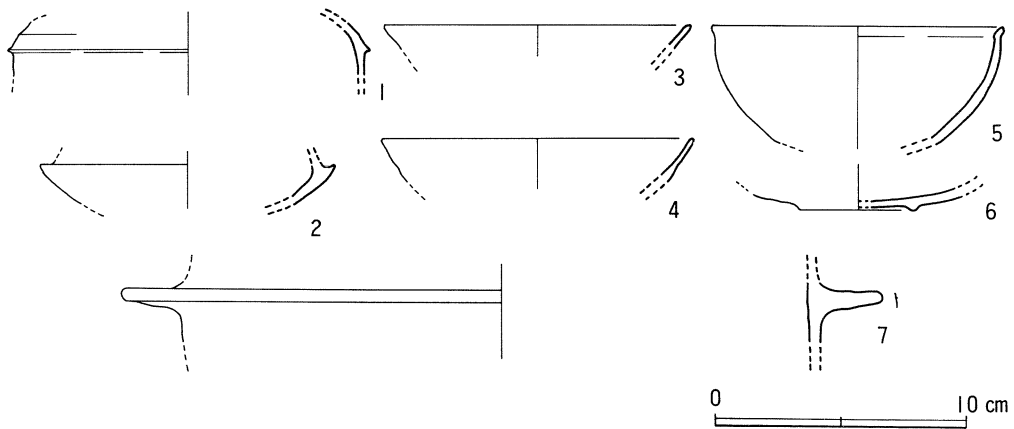


fig.22 床土出土土器

床土、中層包含層からは量にしてコンテナ1箱分の土器の出土をみましたが、土師質の小皿、瓦器碗などがその大半を占めています。その他に須恵器の杯蓋・杯身・陶磁器などが出土しています。1・2は須恵器で、1の杯蓋は天井部と口縁部をわける稜が鈍く、内面は回転ナデ調整を施し、TK 23型式に該当するものと思われます。2の杯身は、受部がやや上外方にのび、端部は鈍く、たちあがりは欠損しています。3・4は、いずれも口径約12cm程の土師質小皿で、口縁端部は丸くおわっています。5の陶磁器は、体部がゆるやかに内弯気味にたちあがり、口縁部で内面へ若干肥厚し、上外方へのびています。内・外面ともに茶色から黒褐色を呈する釉が施されています。7は土師質の羽釜で鏝部のみ破片です。

(2) 石 器

床土の中から出土しました。周辺では未報告ですが、蜚ヶ池遺跡2次調査区から旧石器が出土し、河岸段丘縁辺に旧石器時代の遺跡の存在が知られています。

石器は横長に剝離されたナイフ形石器です。国府型ナイフと異なり、その剝離技術の未熟さがうかがえます。刀部角は 55° 、現存長4.4 cm、幅1.4 cmです。

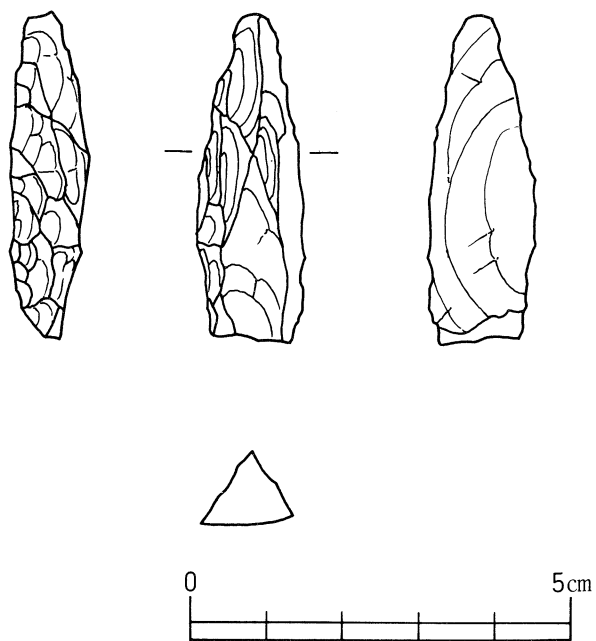


fig.23 床土出土ナイフ型石器

出土土器観察表

図版番号	出土地点・層位	器種	法量(cm)	焼成	胎土	色調	技法の特徴	備考
fig16-1	SD 01 下層	弥生土器	口縁径10.8	不良	精緻	内： } 淡褐色 外： }	不明	
2	〃	弥生土器 甕	—	不良	0.5~1.0mm程 のチャートを含む	内： } 赤褐色 外： }	不明	黒斑あり
fig18-1	SD 01 中層	弥生土器 壺	—	良好	粗い1~3mm大 の長石・石英粒 を多く含む	内：黄褐色 外：淡灰褐色 断：黒褐色	内・外面と もナデ調整	
2	〃	弥生土器 壺	口縁径16.0	不良	粗い1~3mm大 の長石他を多く 含む	内： } 黄灰色 外： } 断：	外：ハケメ 調整後口縁 部ヨコナデ 内：ヨコナデ	
3	〃	弥生土器 壺	口縁径15.8	堅緻	1~3mm大の長 石石英粒を多く 含む	内：灰黄褐色 外：淡灰褐色 断：黒色	外：口縁部 はナデ調整 頸部はハケ メの後軽い ナデ 内：指頭圧 痕	
4	〃	弥生土器 壺	口縁径19.8	良好	やや粗い長石・ 石英を含む	外：黒色 内：黄褐色	外：ヘラミ ガキ調整	外面に黒斑 あり 外面に2連 の円形浮文 あり
5	〃	弥生土器 壺	口縁径19.8	不良	粗い	外：淡褐色 内： 〃		
6	〃	弥生土器 壺	—	良好	径2mm前後の長 石白チャート等 を含む	外：赤褐色 (体部上半) 黒く変色 (体部下半) 内：赤褐色 (体部上半) 灰色 (体部下半)	外：全体に 指ナデ調整 体部下半は ハケメ調整 内：指ナデ 調整 体部下半に あらいハケメ	黒斑あり
fig19-1	SD 01 上層	弥生土器 高杯	—	やや不良	精緻	内： } 灰褐色 外： } 断：赤褐色	外：指頭圧 痕	
2	〃 中層	弥生土器 高杯	脚径 6.8	良好	粗い：1~3mm 大の石英・長石 を含む	内： } 淡黄 外： } 灰色	外：ハケメの のちナデ調整 内：ナデ調整	
3	〃	弥生土器 甕	—	不良	粗い	内： } 淡褐色 外： }	外：タタキ 内：ナデ調整	

図版番号	出土地点・層位	器種	法量(cm)	焼成	胎土	色調	技法の特徴	備考
fig19-4	SD 01 中層	弥生土器 甕	—	不良	1～3mm大の長石白チャートを多く含む	内：黄灰色 外：	外：粗いタタキ 内：ハケメ調整	黒斑あり
5	〃	弥生土器 甕	—	不良	精緻	内：淡灰褐色 外：	外：タタキ	底部は若干あげ底
6	〃	弥生土器 甕	—	良好	2mm程のチャート長石を多く含む	内：黄灰色 外：	外：タタキ 内：ハケメ調整	黒斑あり
7	〃	弥生土器 甕	—	良好	1～5mm程のチャート長石を多く含む	内：黄灰色 外：	外：タタキ	黒斑あり
8	〃	弥生土器 甕	—	良好	1mm程のチャートを含む	内：黄褐色 外：	不明	
9	〃	弥生土器 甕	—	不良	1mm程の砂粒を含む	内：黒く変色 外：淡赤褐色	不明	
10	〃	弥生土器 甕	—	良好	0.5～3mm程のチャート長石を多く含む	内：黄褐色 外：	不明	黒斑あり
11	〃	弥生土器 甕	—	良好	粗い：長石・石英を含む	内：黄褐色 外：断：黒褐色	外：指頭圧痕 内：指頭圧痕・ナデ調整	底部はあげ底
12	〃	弥生土器 甕	—	不良	精緻	内：淡褐色 外：	外：タタキ	黒斑あり
13	〃	弥生土器 甕	—	良好	1～2mm程の長石を多く含む	内：黄灰色 外：	外：タタキ	黒斑あり
14	〃	弥生土器 甕	—	良好	0.5～5mm程の長石チャートを多く含む	内：淡赤褐色 外：黄白色	不明	底部穿孔
15	〃	弥生土器 甕	—	良好	1～3mm大の長石を含む	内：黒く変色 外：黄灰色	不明	
16	〃	弥生土器 甕	—	不良	1～5mm大の長石を多く含む	内：黄灰色 外：赤褐色	不明	
17	〃	弥生土器 甕	—	良好	1～2mm大の砂粒を多く含む	内：黄褐色 外：	外：タタキ 内：ハケメ痕跡	内面に黒斑あり
18	〃	弥生土器 甕	—	良好	0.5～3mm程の長石・チャートを含む	内：茶灰色 外：茶褐色	不明	

図版番号	出土地点・層位	器種	法量(cm)	焼成	胎土	色調	技法の特徴	備考
fig19-19	SD 01 中層	弥生土器 甕	—	良好	粗い：1～2mm 大の石英・長石 粒を若干含む	内：黄灰色 外：黄色	外：タタキ 指頭圧痕 内：ナデ調整	底部穿孔
20	〃	弥生土器 甕	—	良好	0.5～2mm程の 長石を多く含む	内： } 黄灰色 外： }	内：ハケメ 調節	
21	〃	弥生土器 甕	—	不良	精緻	内： } 灰褐色 外： } 断：黒褐色	不明	
fig20-1	SD 02 上層	土師器 甕	口縁径24.0	良好	精緻	内： } 外： } 淡褐色		
2	〃	土師器 高杯	—	不良	精緻	内： } 灰褐色 外： } 断：赤褐色	外：指頭圧 痕	
3	〃 中層	土師器 高杯	—	不良	粗い	内： } 灰褐色 外： }	内：指頭圧 痕	
4	〃 下層	土師器 杯	口縁径13.6	不良	精緻	内： } 外： } 淡黄 褐色	外：指頭圧 痕ナデ調整 内：ナデ調整	
5	〃 最下層	須恵器 器種不明	脚 径12.8	良好	精緻	内： } 外： } 暗灰色 断：灰色	外：タタキ ナデ調整 内：ナデ調整	
fig21-1	SD 03 上層	縁袖陶器	—	不良	精緻	内： } 外： } 淡褐色 断：明灰色	外：回転ヘ ラケズリ ナデ調整 内：ナデ調整	縁袖部分的 に残存ロク ロの回転方 向は反時計 まわり
2	SD 06 上層	土師器 甕	口縁径16.6	良好	精緻	内： } 外： } 淡褐色	外： } ナデ調整 内： } ハケメ調整	
3	SD 06 下層	須恵器 杯身	口縁径8.6 受部径10.8	良好	精緻	内： } 外： } 青灰色	外：回転ナデ 底部はヘラ 切り未調整 内：回転ナデ	ロクロの回 転方向は反 時計まわり
4	SD 03 上層	土師器 甕	口縁径20.6	良好	精緻	内： } 外： } 黄褐色	外：ナデ調整 内：ハケメ 調整	
5	SD 06 下層	須恵器 甕	口縁径18.2	良好	精緻	内：淡灰色 外：青灰色	外：回転ナデ 調整、タタキ 内：回転ナデ 調整、タタキ	
6	〃	土師器 甕	口縁径29.2	良好	0.5～2mm大の 砂粒を含む	内： } 外： } 黄白色	外：ヨコナデ ハケメ調整 内：ヨコナデ	
7	〃	土師器 甕	口縁径27.0	不良・ 軟質	精緻：長石粒 (3mm大)を少 し含む	内： } 外： } 淡黄 灰色	外：ナデ調整 ハケメ調整 内：ハケメ 調整、指頭 圧痕	

図版番号	出土地点・層位	器種	法量(cm)	焼成	胎土	色調	技法の特徴	備考
fig21-8	SD 03 下層	土師器甕	口縁径18.6	不良	長石・石英を含む	内： } 淡褐色 外： }		
9	〃	土師器甕	口縁径23.6	やや軟質	粗い	内：淡黄灰色 外：淡赤灰色	外：ナデ調節 内：ハケメ調節	
10	〃	土師器甕	口縁径24.2	軟質	1～2mm大のチャート長石を多く含む	内：黄白色 外：淡赤褐色	外： } ヨコナデ 内： }	
11	〃	土師器甕	口縁径28.6	やや軟質	精緻	内： } 淡黄灰色 外： }	内：ナデ調節 ハケメ調節	
fig22-1	床土	須恵器杯蓋	—	良好	精緻	内：淡灰褐色 外：淡灰黄色	外：回転ヘラ削り調整 回転ナデ調節 内：回転ナデ調節	
2	〃	須恵器杯身	受部径11.8	良好	やや粗い	内： } 淡灰色 外： }	外： } 回転ナデ調節 内： }	
3	〃	土師質土器小皿	口縁径12.2	やや不良軟質	精緻	内：黒灰色 外： } 赤褐色 断： }	外： } ナデ調節 内： }	
4	〃	土師質土器小皿	口縁径12.4	不良	精緻	内： } 淡黄褐色 外： }	外： } ナデ調節 内： }	
5	〃	陶磁器碗	口縁径11.6	良好	精緻	内： } 茶色から黒褐色を呈する 外： }	外： } 回転ナデ調節 内： }	全面に釉が施されている
6	〃	土師質土器碗	—	良好	精緻	内： } 黄褐色 外： }	外： } ナデ調節 内： }	
7	〃	瓦質釜	—	良好	やや粗い	内：黒灰色 外：黒色 断：灰白色	外： } ナデ調節 内： }	

第V章 ま と め

調査面積は 400 m²と広い調査区ではありませんでした。しかし、そこから大溝 1 本、大規模な溝 2 本と調査区の約半分が遺構の中という状況でした。しかも弥生時代中～後期、古墳時代後期の土器が出土し、西摂における資料の追加をみました。平行する 3 本の溝の性格について言及してまとめとします。

北西から南東方向に流れる溝は計 4 本検出されました。SD-01～03 は大規模な溝ですが、SD-04 は他三者と比べると小規模なものです。水流方向はほぼ平行するので、他三者との関連を考えねばならないのですが、それを検討する材料がないので、ここでは対象から除外したいと思います。

流水の程度はSD-03 が最も激しく、絶えず水が流れていたと思われませんが、他の 2 本の溝は極めて緩やかな水流であったと思われれます。掘削時期はSD-01 が弥生時代中期、SD-02 が 6 世紀末頃、SD-03 が 7 世紀前半頃です。つまり、400 年以上もの時間差をもっても同時期に存在していた可能性が高いこと、しかもほぼ同時期に廃絶したと思われれます。

さて、SD-01 中層からコンテナで約 2 箱分の弥生土器が西側 2 段目溝端付近で出土しています。溝内堆積土に合わせて緩やかなスロープ状に散在し、溝の中心に向って全体的に傾いています。その出土層位は中層ですが、下層に若干めり込んだ様子を示す土器片や自然石が多数見られます。これらから、土器は西側から投棄され、水流による二次的移動の可能性は低いと思われれます。土器は甕を中心に壺と少量の高杯・鉢と器種が限られています。日常使用する雑器とは思われれない器台・二重口縁壺・小型精製鉢の出土が極端に少なく、2 点の出土にすぎません。口縁加飾壺（全面が黒斑で覆われており不良品といえます）と二重口縁壺の細片です。

出土土器のほとんどが器形変化の少ない甕なので時期を明確にするのは困難です。甕の底部成形に円板充填法という弥生時代後期に普遍的にみられる技法を採用していることや、口縁加飾壺の出土から、後期でも後半の土器と思われれます。

SD-01 の遺構説明の項でも記しましたが、この溝の造成は興味深いものです。二段目溝端中に溝底の砂礫層が部分的にもぐり込んでいきます。平面的には確認不可能でしたが、これら溝端の地山土は純粋な地山土では



fig.24 SD-01 中層出土土器の層位関係

なく、地山土を盛り上げた土です。これとは異なり、SD-02・03 にみられたように、溝壁の地山土が次々に崩壊した部分も若干みられます。しかし、概ね礫の範囲がSD-01 とほぼ一致するので、両者は密接な関連を持っていたと思われます。

すなわち、1. 礫の範囲が溝とほぼ一致する、2. 二段目溝端に盛土が施されていること、3. 礫の範囲が不規則、と要約できます。旧小河川を再利用して溝として機能させたと思われます。一定の規格の溝にするために部分的に盛土をおこない二段掘りの溝を形造ったと思われます。

SD-01 と 02・03 の関係はSD-08 がよく示しています。SD-02 の土層図からSD-08 の土層は 02 上層に切られており、これらの方が早く埋まったことを示しますが、SD-08 の機能—SD-01 の水をSD-02 に流し込む—から埋没時期の差は少ないと思われます。3本の溝は同時にその機能を発揮していたと考えられます。したがって、3本の溝が同時存在していた7世紀前半以降のSD-01 と、それ以前のSD-01 の性格が同一であるか疑問です。集落を西側に推定すると、集落の人々がSD-01 に接する機会がSD-02・03 が造られたことによって減少するためか、SD-01 上層から6~7世紀代の土器の出土は皆無です。

以上から次のようにまとめることができます。

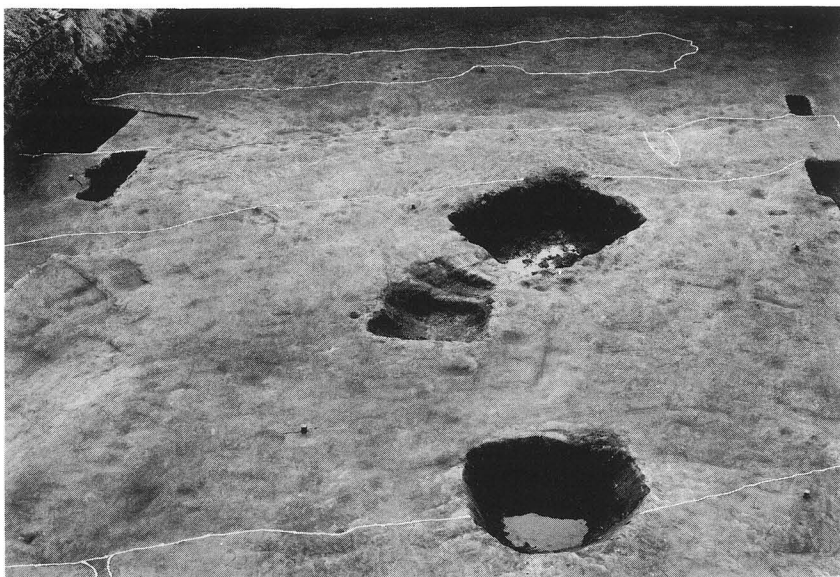
1. SD-01 内出土土器は一時期の一括投棄によるもので、その要因として集落の移動があげられます。
2. 溝幅・特異な護岸施行・水流の僅少性から、集落を取りまく環濠の可能性は否定できません。その当時の集落はより西に展開していたと想像できます。
3. 弥生時代の住居区域の中心は調査区よりも西側で、現在の大阪空港ターミナル近辺になると思われます。
4. SD-02 の水流の程度は 03 ほどではありませんが、03 と合流したり、両者はより密接な関連を持っていたと思われます。つまり、この2本の溝の流れの程度は違うが同一の機能を持っていたと思われ、おそらく農業用水路でしょう。
5. これらの溝は平安時代には埋没しました。

なお古墳時代後期（6~7世紀前半）の土師器が出土していますが、甕主体の出土なので検討を加えることができません。当時期の資料は少ないですが、千里川南岸にある本町遺跡などこれから数多く発見される可能性があります。これらの遺跡の進展により具体像が明らかにされるでしょう。

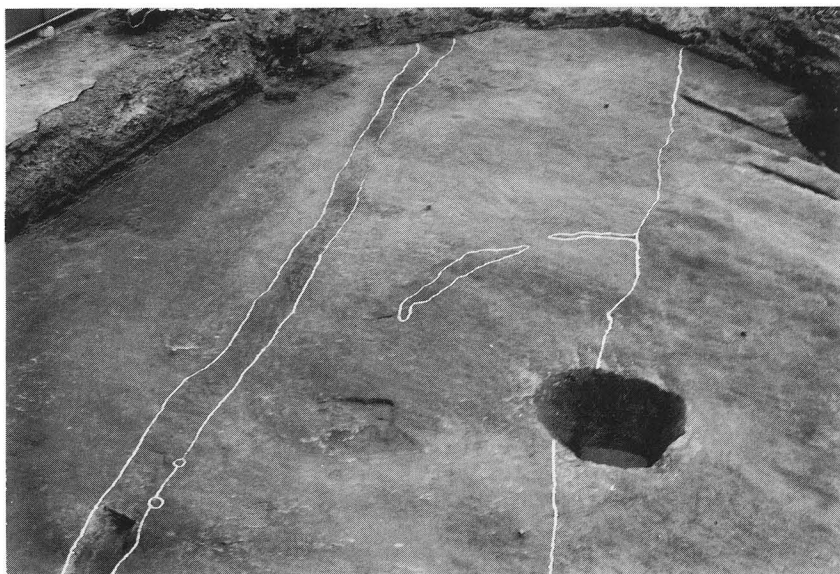


fig.25 SD-01 断ち割り状況

图 版



(東から)



(北から)



(東から)



(東から)

PL・3
SD-01 土器出土状況



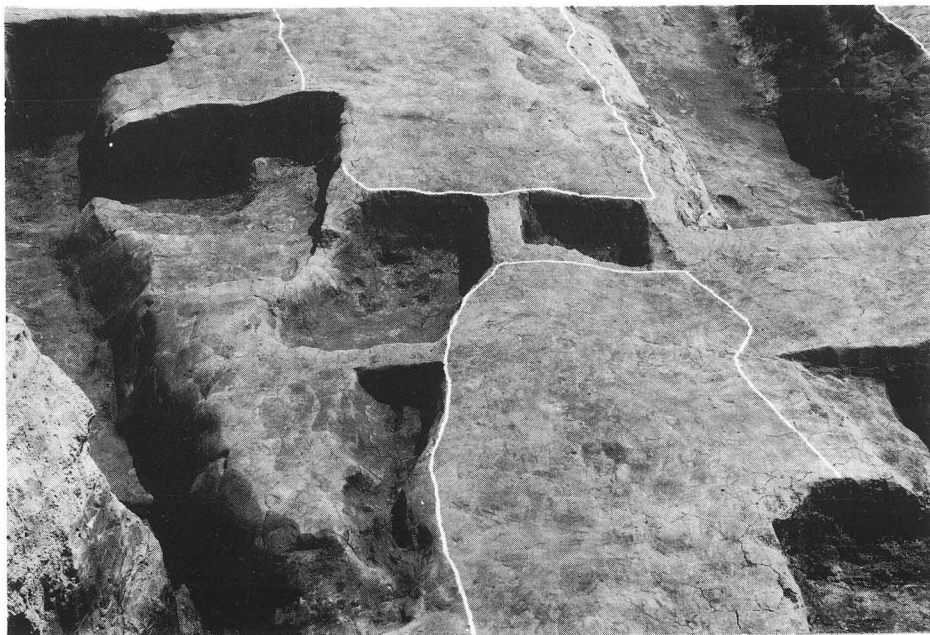
(東から)



(北から)

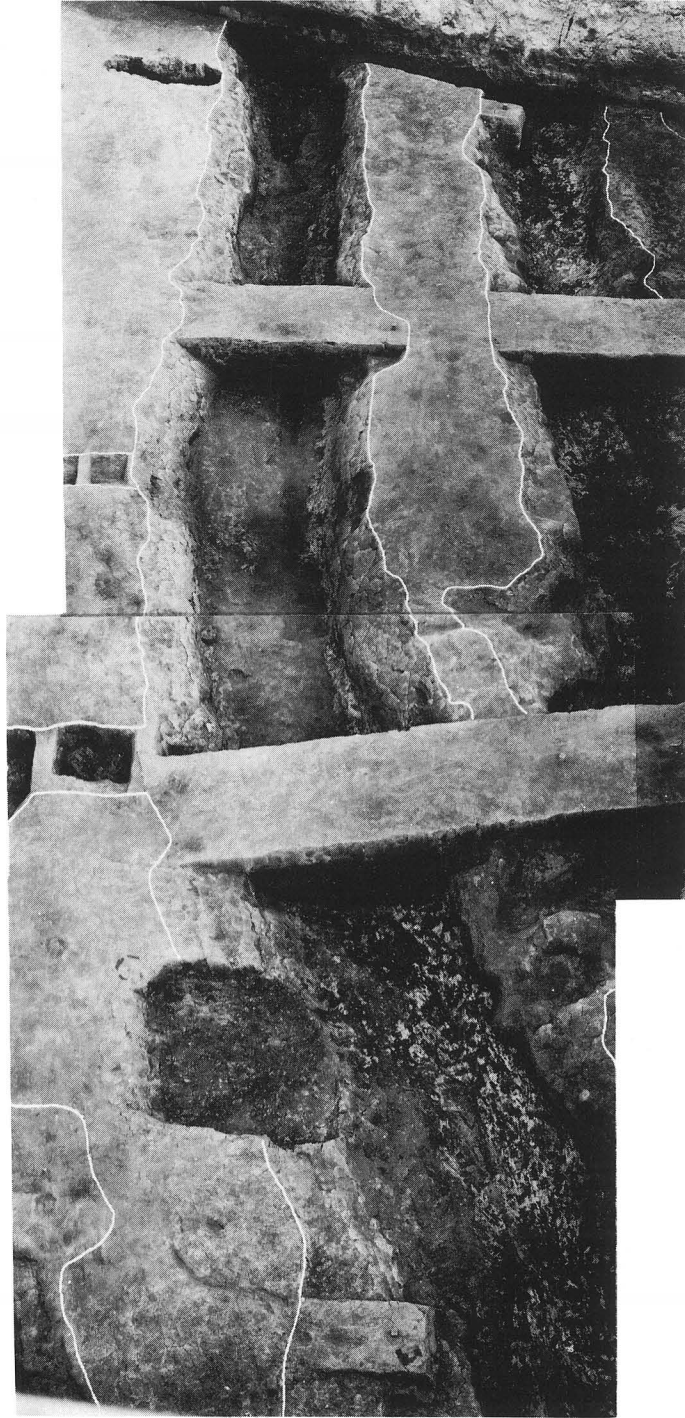


(SD-01 北から)



(SD-08 北から)

P L ・ 5
遺構検出状況



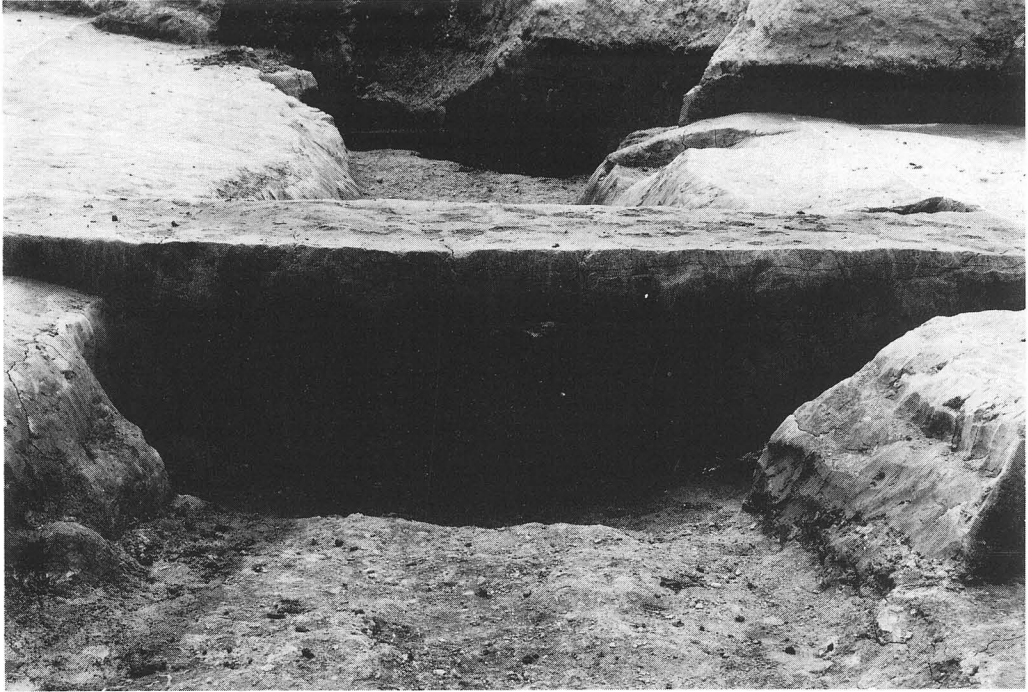
(SD-02・03 北から)



(SD-01~03 東から)



(SD-09・10 東から)



(SD-01 1アゼ 北から)



(SD-02 2アゼ 北から)

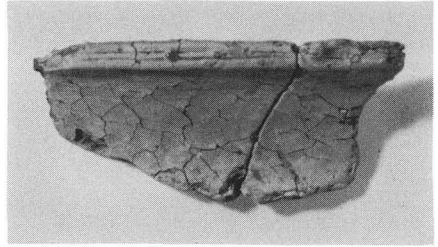
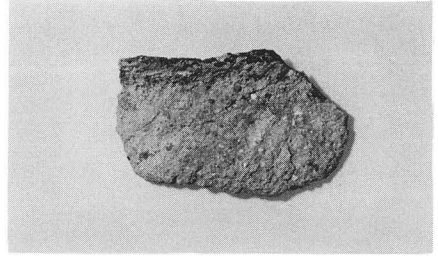


(中層出土土器)

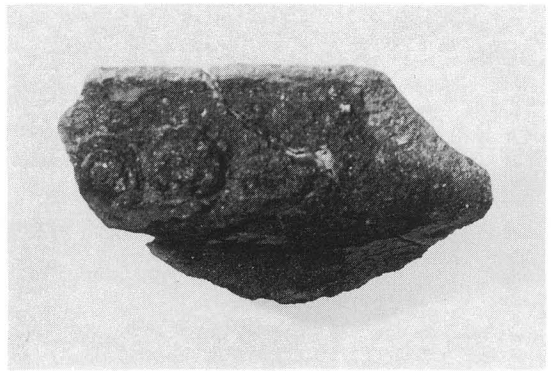


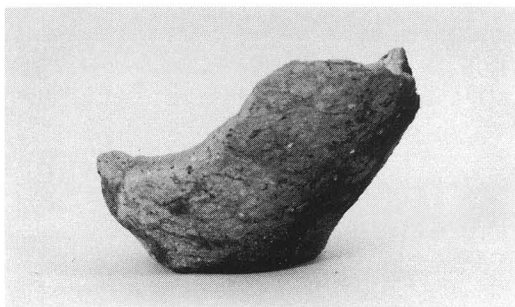
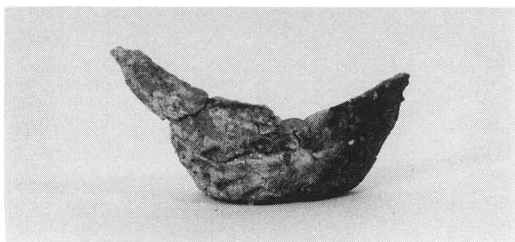
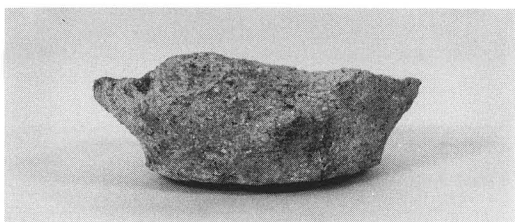
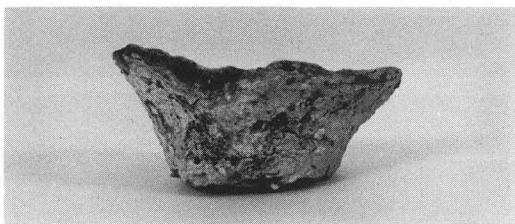
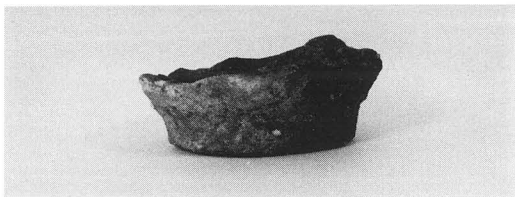
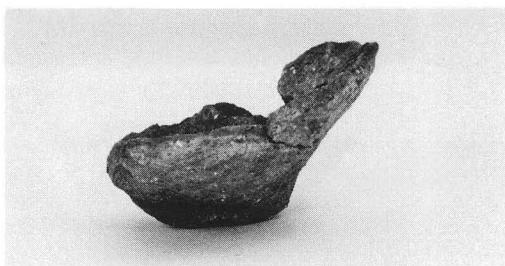
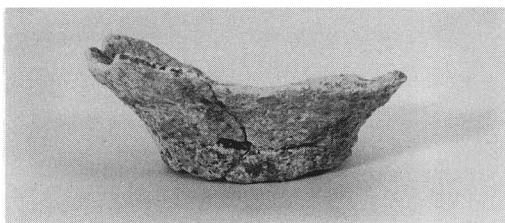
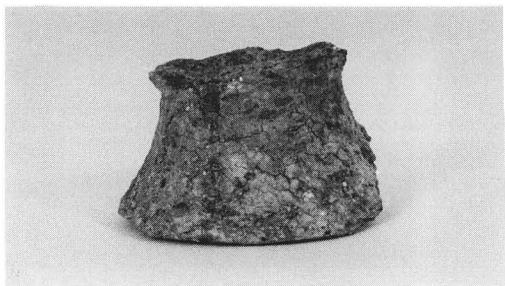
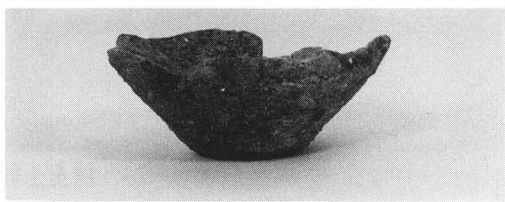
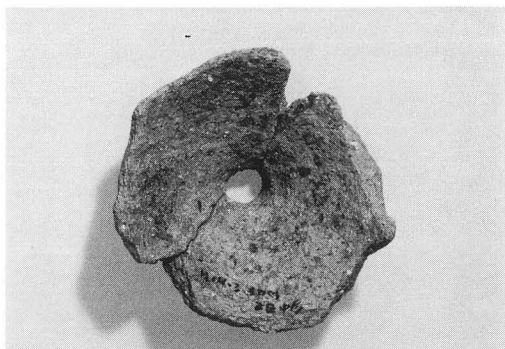
(中層出土土器)

PL. 9
SD-01出土土器

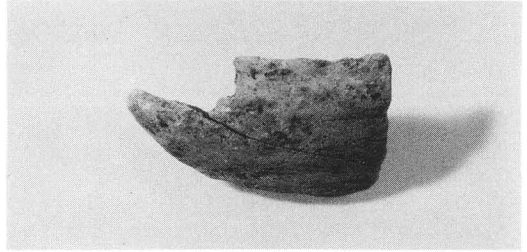
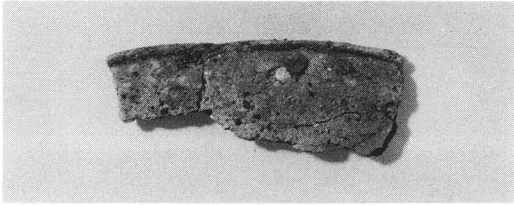
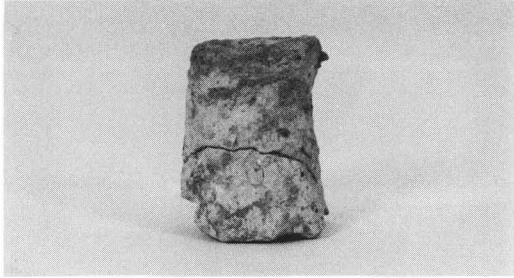


(中層出土土器)

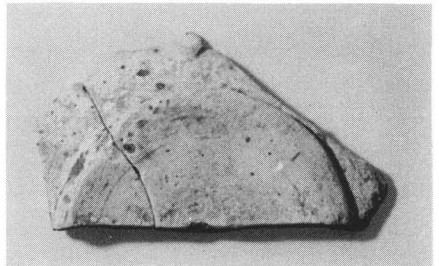
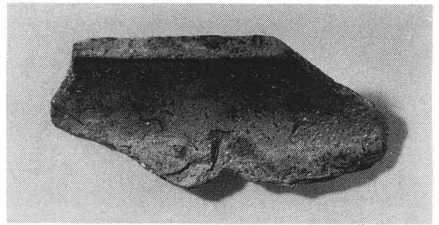
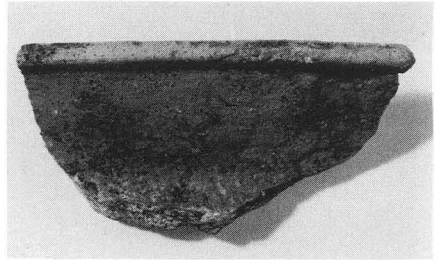
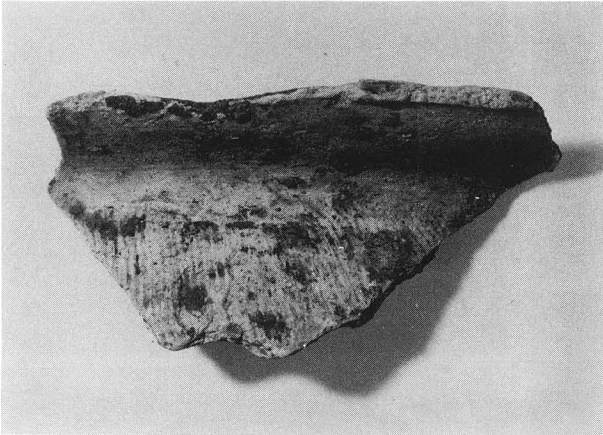




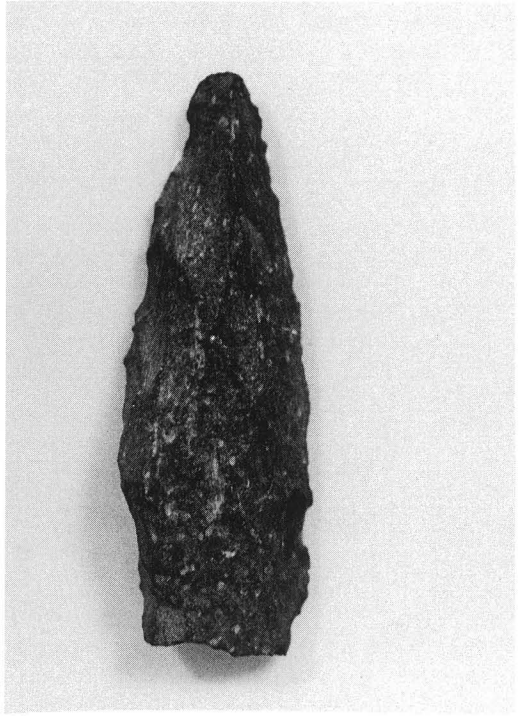
PL・11
SD-02・03出土土器



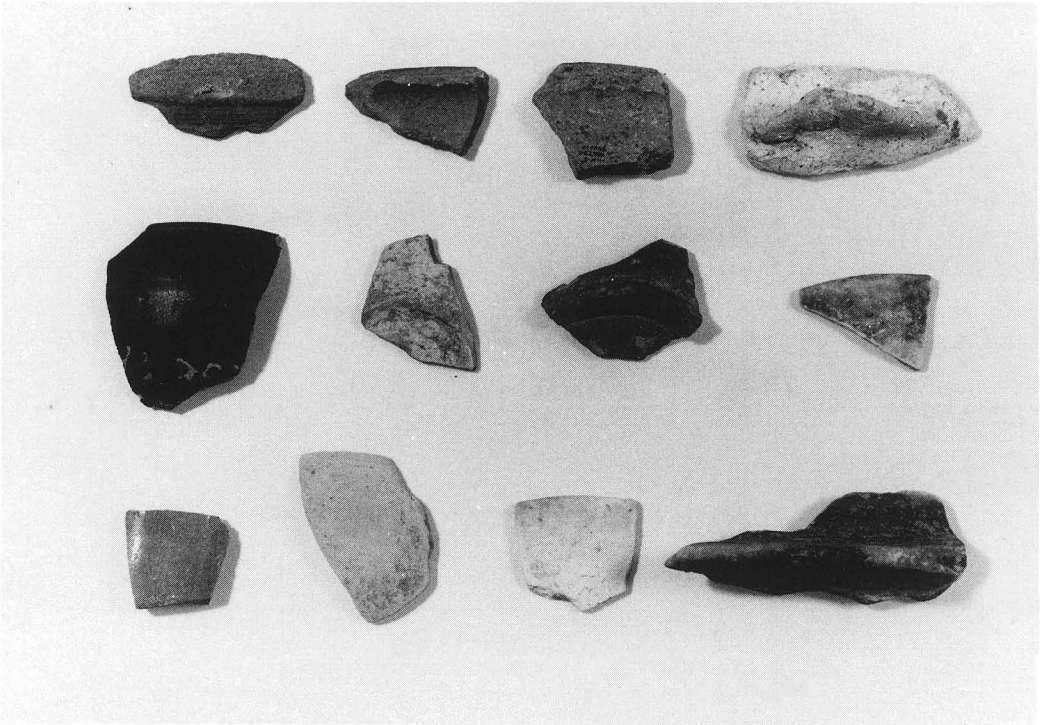
(SD-02 出土土器)



(SD-03 出土土器)



(SD-02 出土石器)



(床土出土土器)



豊中市文化財調査報告第 24 集

蛭ヶ池西遺跡

1988年3月

発行 豊中市教育委員会
豊中市中桜塚3丁目1-1
編集 社会教育課文化係
印刷 (株)総合印刷センター